

## ボランティアを終えて 徳山教会 白井 夏鈴 (小5)

東日本大震災が起きた時、私はまだ6才でした。なので、震災のことはあまり覚えていません。ネットやテレビでしか津波や地震のことを知りませんでした。お母さんからボランティアの話を聞いて、津波や地震のことも知りたかったし、被災地の人たちの役に立ちたいと思い参加することにしました。

行く日が近づくにつれて、被災地の人たちの役に立てるか心配でした。当日もこの心配な気持ちを持ったまま出発しました。釜石駅に着いた時までは心配だったけど、なぜか着いた時に「明日から頑張るぞ！」という気持ちになれました。

私が心に残ったのは、仮設住宅のお茶っこの活動と、津波襲来時の動画(ユーチューブにアップされている)が撮影された現場に行ったときです。仮設住宅では、はじめ何をしたいのかわからなくて、じっと座っていると、柴田神父さまから「飲みものの希望を聞いてきて！」と言われました。緊張して行きづらかったけど、勇気を出して言ってみると、すごくやさしい方で「すごいねえ！じゃあこれにする」と言ってもらえました。そのときは「やってよかった」と思えました。初めてこの地域の方とお話をして、こんなにやさしい人がたくさんいると思うと、お話がふくらみました。

動画が撮影された場所は、津波が来る前は、家やマンション・アパートがたくさんあったけど、津波ですべてが流されて、今は何もなくて、まっ白の状態でした。ベース・スタッフさんのお話では、津波が来る前は海の周りに家を建ててもよかったけど、また津波が来るといけないから今は建てられない。きれいな海の周りには、家を建てたらいけないことになっているそうです。本当に津波は、すべて大切なものも、持っていつてしまっ、悲しい津波だなあと思いました。

このボランティアで初めて津波のビデオや津波の現場に行きって感じたことがあります。突然命をうばわれた人たちは、まだやりたかったことや、あともう少しで手が届きそうだったこともあつたらうに、津波や地震が来てすべてうばわれてしまいました。津波は、人の命もうばう、人の大切なものをうばう、そんな津波を見た人たちは、どれだけ心がきずついたかと思ひます。でも、被災された方たちは、津波や地震の悲しみなど全く感じさせず、前進しようとしてらっしゃいました。

私は、被災された方々の役に立ちたいと思い参加させてもらいましたが、被災された方々にやさしくしていただいて、元気をもらいました。このもらった元気を、人を助けたり、自分のできることで、人を元気付けられたらと思ひます。

## 2016年 夏季東北被災地ボランティア報告 徳山教会 白井稚葉 (中1)

私は、東北に行く前とっても不安な気持ちでした。

『私に、何ができるんだろう。』とずっと思っていました。だけど、大槌町の町の方々に教えてもらうことの方が多かったです。

中でも、1番私の心に残っているのは、仮設住宅に行った時のことです。私は、80代位のおばあちゃんと話をしました。そのおばあちゃんは、ひ孫さんのことや、おばあちゃんの大好きな地方の踊りなどについて色々話をしました。話している時のおばあちゃんの顔は、とても楽しそうでした。そして、帰る時に「頑張つてね。」と、おばあちゃんが言ってくださいました。きっと、おばあちゃんの方が、辛いのに私を励ましてくださって本当に嬉しかったです。私達が行って、少しでも役に立てればと思つて行ったのに、逆に元気をもらって帰ることが出来ました。

4日目は、視察に行きました。実際に行ったら、あまり復興していなくてびっくりしました。「ちょっと海に出ただけなのに。」と思いました。あと、役場にも行きました。とても悲惨な状態でした。かべはめくりあげられていて、中のものがぐちゃぐちゃになって、とても見ていられる状況じゃなかったです。その時、スタッフさんが言われていたことが、「ここを取り壊すか、取り壊さないか議論になっているんですよ。」と、教えて下さいました。私は、残した方がいいと思ったけど、話を聞いているとやっぱり残さない方がいいのかなと思いました。なぜなら、そこで働いていた人の家族は亡くなってから1度も役場に行っていない、ということスタッフの方から聞いたからです。やっぱり、その場に行くときのことを思い出してしまう場だからなのかなと、とても難しい問題だなと思いました。

今回初めてボランティア活動に参加させていただき、実際の現場に行ってみてわかった事がたくさんありました。こちらに帰っても、募金などをして役に立つ事ができればいいなと思います。それと、私も家族と災害に備え、話あっていきたいです。また機会があれば、ぜひ、行きたいなと思います。

大槌ベースの方、一緒にボランティアに行ってくださった方、瀬川さんご夫妻、柴田神父様、本当に有り難うございました。

## 2016年 夏季東北被災地ボランティア報告

徳山教会 白井隆弘

東北地震から5年以上経過しテレビやネットでの現地報道も徐々に少なくなりつつあります。今回、自分自身の目で現地の様子を観てどのような様子であるのか感じたいこと、そして私の勤めてる会社の方（関東）がボランティアに参加した話を聞き、機会があれば参加したいと考えていました。

ちょうど夏休み前に教会からボランティア活動の募集があり、これはチャンスと考え参加することを決めました。また、子供達（中学1年生、小学5年生）にも、よい経験になると思い同行させて頂きました。

仕事の関係で全行程は5日間（8/23～8/27）の工程でした。ボランティアの日程が近づくにつれ自分に何が出来るであろうか不安も増してきました。現地で皆さんとお話できるのか？ もし沈黙が続けばどうすればいいだろうか？ 様々なことを考えていました。

初日（8/23）は、移動日のみで約11時間電車等に降られ現地である釜石駅に到着。駅を降りると正面には、新日鉄住友 釜石製鉄所の工場が我々を迎えてくれました。製鉄所でありその規模は大変大きなもので圧倒されます。その後、車で大槌町にあるベースキャンプへ向かう道中、道や公共施設、集合住宅など新たに建設、整備され新たな町づくりが行われており、人々の新生活がスタートしている印象でした。走行中は夜間であり、気がつかないのですが道路には津波により浸水した箇所が道路標識で表示してあり、5年前の津波の影響は大きいものであることが現時点でもわかるようになっています。海拔30m以下はほとんどの範囲が津波の影響を受けている様子でした。

翌日より本格的なボランティア活動がスタートしました。まず初めに研修会として、被災地の津波による被害について、映像（Youtube）を参加者みんなで見ました。はじめはテレビで見たこ

とあるものでしたが、徐々にテレビでは放映できないような酷い状況の映像が、我々の目に入ってきたときは、思わずハッとしてしまうものでした。まるで映画のワンシーンのようなもので、これが現実にこの場所で起こった記録であると強い衝撃を受けました。その中には子供達の笑顔のシーンもあり、悲惨な状況の中でも希望の光を感じることができました。

その後、我々は”花壇の整備グループ”と”子供センターグループ”の2グループに分かれ、私は”花壇の整備グループ”でボランティア活動を開始しました。

2016年夏季の国民体育大会が岩手県で10/20から行われます。

活動拠点地である大槌町でも競技が行われ、多くの国民の方が町を訪れるそうで町の玄関口である場所の花壇を整備するものでした。

花を植える場所を確保するためにまずは草抜きを行いました。天候にも恵まれ順調に作業を終了することができました。

夕食後は大久保さんの講演が行われました。被災される前は不動産業のお仕事をしていたのですが、その後は尺八の演奏者として音楽を通じ被災の事を語り継ぐ活動をしている方です。

講演では、津波に襲いかかる状況をリアルに我々に語って下さいました。内容は津波の先端はがれきで覆われ、そのがれきが人に襲いかかり必死に逃げても逃げても追いかけられ、路地の角を曲がり山を登ることで九死に一生を得ることが出来ました。生死の運命は数秒の間に決められた現実、被災後は人々が互いに声を掛け合い助け合いながら避難生活をし、人とのつながりが大切なことを感じました。

同時に花壇の整備も、多くの国民の方に今の大槌町は元気を取り戻していることをアピールできると感じ整備の重要性を新たに感じました。

現地の方とのふれあいは、”お茶っこ”というお茶と共にお話しするイベントでも行われました。お茶っこは、仮設住宅の集会所で行われ、参加者は年配の方が多くスタートしました。話は前後しますが、初めて仮設住宅を目の当たりにし雰囲気は非常に静かなものでした。これでは人と話す機会も少なく、小さな殻に閉じこもる環境にあると感じました。

人と話す機会を作るために、“お茶っこ”のイベントは必要だなと同時に感じました。

さて“お茶っこ”の話に戻しますが、おばあさんから「どこから来たの？」から会話が徐々に進みました。おばあさんから釜石には製鉄所があり、九州の大牟田から来た方がいたこと。特に親類がいる九州の話で盛り上がりました。

皆さん明るく笑顔で話しましたが、思い出話になると声のトーンに下がり「思い出の写真などはすべて津波に持っていかれ、何も残っていない」と言われ、返す言葉もわかりませんでした。

表面上は明るく振舞っているが、心の奥底はまだ被災の傷を負っていることを痛感しました。

この人々のために、このボランティア活動を通じ助けになることをしなければと思いました。

活動の後半では、被災地の視察が行われました。

現在の被災地は、土地の嵩上げ工事で重機が行き来している状況です。町は整備される途中ですが、本当に何も無い状態です。被災前後でこれだけ違いがあるのかと疑いたくなるのと同時に、津波の被害は大きなものであったことを再認識しました。

海岸側に移動すると、元々ある5m程度の分厚いコンクリート製の防波堤があります。

その防波堤が津波の威力で変形しており、人間が想定していた津波の大きさをはるかに超え防波堤の性能を発揮していない状況をまざまざと目の当たりにしました。

自然の力は大きく、人間もその一部であり、その中で生かされていることを感じました。

ボランティア活動最終日は、天候が崩れ雨が降り出してしまいました。しかし、花壇の整備は残った状態。雨も作業ができないほど強くないこと、これまで出会った人、町の状況を考えると作業をせずに宿舎に戻ることは出来ないと考え、メンバーに迷惑をかけましたが作業を決行し我々のミッションを完了しました。

続きの大槌町のお出迎え準備は、次のボランティアのメンバーに託したいと思います。このボランティア活動を通じ、多くの方のご支援ご援助のおかげで、何事も障害もなく活動することができました。誠にありがとうございました。

最後にこの経験を忘れないために自分自身に素朴な疑問を投げかけたい。

”なぜボランティア活動を行うか？”

悲惨な状況下でも希望を持ち立ち上がろうとしている人を見て見ぬ振りにはできません。

その方々が次の希望を得るためにお手伝いできれば、更によりよい世界になるのではないかと思います。また、無関心となれば無意識に現地の方の苦労を忘れてしまい他人事になってしまう。そうならないためにも、関心を持ち続け忘れないようにしなければと感じました。

いつか、ふらっとあの花壇の様子を見に行きたい

以上

### ボランティアに参加して 松原 健吉 (18歳)

今回岩手のボランティアに参加して、現地に行く前の自分の被災地に対する考えやイメージと、帰って来てからの自分の被災地に対する考えとイメージが結構変わったと思います。震災の研修や映画を見て、本当は目を伏せたい気持ちもありましたが、それでも自分たちは目をそらさず、しっかりと受け止めて、これからの教訓としていかなければならないと思いました。現地でもいろんな方がおっしゃられてたように、残された者がこれからしっかり頑張らなければならないと思いました。

実際、今回のボランティアは直接災害復興の支援になれたのかという疑問も自分の中にあります。けれども、地域のお年寄りの方々や子供たちと触れ合うことができ、すごく貴重な経験をさせていただいたし、みんな3月11日以降も、前を向いて頑張っておられると感じ、感心させられました。

まだ、仮設住宅がたくさん残っていることや、大槌町の復興が他の地域よりも遅れていることも初めて知りました。

今回のボランティアで学んだ知識や行動力をこれから社会に出た時に活かせるように、体験を胸に刻んでおきたいです。

### ボランティアに参加して 松原 優希 (17歳)

今回、自分は、友達2名と岩手県に行きボランティアに行き4日間活動をしました。初日の移動の時は、東北ボランティアの実感がなくて楽しくしていました。けれども、2日目、震災研修がありボランティアをしてみて、岩手や東北地方がとても辛く、人々は大変なのだとわかりました。

ボランティアの内容は、子供達の相手、花壇の手入れの二つで、自分たちは子供の世話、遊び相手をしました。思っていたよりも元気で明るく、自分も働いて楽しかったです。

3日目、4日目も同じ活動をし、それに加えて被災した場所に行き、現状を詳しく知ることができました。少しでも元に戻っていると思っていましたが、ほとんど何にもなく、土の山が見えるばかりでした。自分の中での常識が崩れたような、そんな衝撃でした。自分の家、町があのようなになったとしたら信じられないし、多くの人が死んでいるので、みなひどい苦痛を味わっているはず。それなのに、それを思わせないような明るさがありました。ボランティアなのに元気をもらって楽しむことができました。今回で2回目の東北でしたが、自分でできることはしたので良かったです。いつかまた、ボランティアすることがあれば、今回のことを生かして、より良い働きをしたいと思いました。

## ボランティアに参加して 賀藤 峻永 (18歳)

僕がこのボランティアに参加するきっかけになったのは、友達からボランティアに行ってみないかと誘われたことでした。僕自身は震災のボランティアだけでなく、震災以外のボランティアも、東北に足を踏み入れる事自体も初めてで、何もわからない状態で不安を感じながら参加することになりました。

ボランティア活動は8月23日から28日で、23日が移動、24～26日が子どもセンターに行くこと、27日が花壇の手入れ、28日が移動で、ボランティア活動自体は4日間でした。

1日目はほとんど移動でした。大槌ベースの人達は不安だった僕を笑顔でむかえてくれ、車で釜石駅からベースに送ってくれました。駅に着いたのは遅かったので、車移動の際の景色はあまり見えませんでした。また、大槌ベースのまわりは大分復興が進み、津波の痕があまり残っていないと感じました。

2～4日目は、子どもセンターに行き、子ども達と紙飛行機や折り紙、外で鬼ごっこやサッカーなどをしてとても元気に笑顔で遊びました。ここは大槌町に一つしかない学童保育の場所でした。しかし、鬼ごっこをしたところは砂利や石がまだあってあまり安心しきれるところではなく、まだまだ子ども達が走り回れるような場所は少ないのだと感じました。

そして26日に、大槌町全体を見て回りました。僕はこのときとても強い衝撃を受けました。今まであまり津波の痕は残っていないと思っていましたが、そこは、あたりを見回しても一面真っさらで、真新しい道路が綺麗にひかれて電柱だけが建っているという状態でした。今まであった壁や家、道路や線路など人が時間をかけて作ったものが津波という自然の力が来た一瞬でなくなることをまのあたりにして、怖いような信じられないような気持ちになりました。それと同時に、今まで会ってきた人達はこの出来事を乗り越えて今の笑顔があるのだなと深く感じました。

津波の跡地でぽつぽつ建っている建物の中に当時のまま残されているという旧大槌町役場がありました。ここは、津波当時の町長などそこで亡くなった方が何十名もいる場所で、地域の人、とくに年配の方々からは壊してほしいと言われている場所でした。僕はその建物を見て津波の怖さを再び感じる事ができました。周りはこれからどんどん復興していき、月日が経つにつれ津波のを感じ取りにくくなっていくはずだからこの建物は残っていてほしいと思いました。

5日目は花壇の手入れをしました。この花壇は今年にある岩手国体の会場の一つになっている大槌町の玄関口にある花壇なので、とても一生懸命手入れしました。終わった後に地域のボランティアの人が笑顔で御礼を言ってくれたので自分も少しは他の人を笑顔にできたのだなと実感できました。

今回のボランティアでは、大槌の復興の現状と津波の痕を知ることができました。でも大事なのはこれで終わるのではなく、それを誰かに伝えていき、関心を持ってもらうことだと考えているので、今後は積極的に周りに伝えていこうと思いました。

## 東北ボランティアに参加して 小さな花幼稚園 山下陽子

初めて東北のボランティアに参加させて頂きました。

参加させて頂いたきっかけとなったのは、今年の4月に起きた熊本県での地震です。テレビや新聞などを通して、被災の状況を知ることができましたが、実際に柴田園長先生が被災地に救援物資を届けに行ってくださったり、現地の状況を写真などで教えてくださったりと、実際に目で見て感じられたことを話して下さる姿や、その話を真剣に聞き自分たちに何が出来るのかと一生懸命に考える子どもたちの姿を見ることができた時に、実際に自分自身の目で見ることの大切さを感じました。

5年という年月が過ぎ、私に何が出来るのかという不安な気持ちもありましたが、このボランティアを通して、多くの事を感じ、また学ぶことが出来ました。

ボランティア中には、様々な体験をさせて頂きました。特に印象に残っているのは、被災された方からお話を聞かせていただいたことです。

そのなかで、『覚悟のない死』という言葉が印象に残っています。愛する人たちを残して、突然この世を去ることになった方たち、愛する人を突然失った方たちがいることの悲しみ、また当たり前のように来ると信じている明日や当たり前のように愛する人と過ごせると思っていることが当たり前なことではないということに気付かされた言葉でした。

日々の保育に追われて、毎日があっという間に過ぎていきますが、その過ぎた一日一日は誰かが一生懸命に生きたかった一日だったと感じ、自分自身を見つめ直すきっかけにもなりました。

また、城山公園から実際の大槌の街並みを見たり、旧役場へ訪れました。5年という月日が流れ、復興に向けて一生懸命に動かれている方たち・・・同じ悲しみを繰り返さないようにと当時のことを語られている方・・・津波によって愛する人や家を失っても、生きていくためにまた海に出られている方の姿に心を打たれました。

今回のボランティアに参加して、幼稚園で先輩の先生方と毎日一緒に働くことができること、子どもたちが今日一日をケガや病気をすることなく過ごせたこと、今日も一日頑張ると送り出してくれる家族がいてくれることを当たり前だと思わずに感謝して生きていくことの大切さを改めて感じる事ができました。

そして、貴重な体験をさせて頂いたことに本当に感謝しています。ボランティアで感じたこと、学んだことを忘れることなく過ごしていくとともに、もし同じように災害が起きたときにどのようにして自分たちの命を守っていくかなどを話し合っていきたいと思いました。ありがとうございました。

東北ボランティアから一ヶ月が過ぎました。その間にも様々な出来事がありました。私たちが山口に戻った2日後に、台風10号が東北と北海道を襲い大槌町も被害を受けました。2箇所の仮設住宅は浸水し解体が決まりました。視察で訪れた市街地はかさ上げ工事が進んでいましたが、住宅再建の意向を示している世帯は区画数の4分の1にとどまるそうです(9月11日朝日新聞朝刊)。また、私たちが昼食をとった“三陸花ホテルはまぎく”に天皇皇后両陛下が訪れるとの記事がありました。10月の岩手国体を前に復興状況を視察されるそうです。(9月23日の朝日新聞朝刊) 私たちが関わった“おもてなし花壇”もご覧になられるでしょう。人の記憶は時と共に薄れていきます。けれども、8月に大槌を訪れていたものでこれらのニュースを身近に感じました。

カリタス・大槌ベースには2011年の冬休みからこれまでに11回お世話になりました。この6月には初代のベース長・古木神父さんが亡くなりました。「受け身にならないためにも、ボランティアで何をするか準備してきてください」と引率のイロハを教えてくださいました。また、どの仮設に訪問するのかあらかじめ段取りしてくださるのも大槌ベースならではのです。人数変更など参加者のニーズに細かく応えてくれるのも生利さんはじめスタッフがいてくださるからです。このような恵まれた環境の中でボランティアが実施できました。

今回は、山口の瀬川さんご夫婦(いつもながら準備・実施で大変お世話になりました)、天使幼稚園の先生、萩光塩の卒業生、加えて徳山から7名も参加者がありとても嬉しく感じました。「現地に行って何かしたい」と思う気持ちを讃えたいと思います。震災から5年半経って、震災の爪痕はほとんど残っていない中、被災直後の様子は想像しにくかったと思います。それでも体験記を読む限り「参加してよかった」とコメントされているので一安心しました。若い方ばかりだったので経験をこれからどう生かしてくださるかも楽しみです。私自身も若い感性から学ばせて頂きました。

2011年6月に初めて宮城県の塩釜でボランティアした時の私は打ちひしがれていました。あたり一面の住宅地が津波で流され無残な瓦礫と化している姿に言葉を失いました。住宅販売をしていた私には、津波で家が流されることは夢にも思いませんでした。住宅は、家族の誕生と成長を守ってくれるもの、そう信じて販売していた努力も崩れ去った気がしました。一生懸命汗を流してヘドロかきをしてもいつ終わるのか途方もなく感じました。ミサをしても神様の愛がどこに働いているのかわからなくなっていました。自分がボランティアに来ていることの意味もわからなくなっていました。しかし、2011年12月に大槌ベースに引率してから、だんだんと気持ちの変化が起きました。被災は辛い体験でしたが「何かしたい!」という優しい気持ちが掘り起こされていきました。人助けのつもりで始めたことが、だんだんといただく恵みの方が大きいことを実感しました。新しい10名が参加されたこと、教会・幼稚園にとどまって支えてくれる方がいてくれること・・・日頃の使徒職では味わえない特別な恵みをいただきました。遠いところにでも出かけて行って想いを伝える。少しですがアンパンマンの生き方を実践できました。

大槌町の時の流れは静かです。少しずつしか変わりません。大槌の方に寄り添うベースは、来年3月に閉鎖されるので、多人数でのボランティアはこれが最後になりました。今後の宿泊場所は、ベースの事務所になります。宿泊人数は限られますが、これからも大槌ボランティアを継続したいと思います。ご理解とご協力をどうかお願いします。

## 大久保正人(和太鼓演奏者)さんの話 (2015年の内容も一部含まれています)

2016年8月24日 カリタス・ジャパン・大槌ベースにて

大久保さんの家は、旧大槌町役場の近くあり不動産業を営んでおられました。

<被災当時のお話し> 津波で被害を受けているのに、みんな異様な静けさだった。宙に浮いているような感覚。「家族を捜したい、家を見に行きたい」と思っても町は火の海。津波の後、プロパンガスのボンベが爆発して5日間燃え続けた。その晩は、ブルーシートにくるまってフロアの上に横になった。避難した中央公民館にも徐々に煙が立ちこめ始めた。近くの木々が燃えだした。でも何も情報がない。火災はひどくなる一方だった。3日目になって、もっと高い場所の城山公園に移動した。中学校の体育館が遺体安置所になった。自分の父親を、一体一体確認するしかない。ブルーシートをめくりながら顔を見て「ちがう、ちがう…」時々、知ってる人が出てきてショックを受ける…。最初の頃のご遺体はきれいだった。でも、日数が経つうちに…泥を飲んで亡くなられている方…日を迫うごとに凄まじさが増していった。探している遺族に引き渡せるように防腐剤をご遺体に打っていた。でも、夏が近づくと腐敗が激しくなるのでDNA、歯並びなどのデータを取ってすぐに火葬した。時計、服装、体のどの部位が見つかったか写真や文章にして閲覧できるようにまとめていた。皆さん、大概そのような体験をしている。

震災前、父は盛岡で狭心症で入院していた。大槌病院に3月10日に入院した。翌日の10時に歯医者の予約をした。病院から戻ってすぐに地震が来た。自分は地震から20分後(避難が遅かった)に逃げた。それがラッキーだった。車を走らせたが渋滞で進まない。自分の車は最後尾。仕方なしに、別ルートを選んだ。そこは道がすいていた。ジャズ喫茶の人など5名で城山体育館に逃げた。また、街に戻ろうとしたが、消防団がこちらに向かっている。「逃げろ！」津波で家の屋根がめくれ上がっている。粉塵…竜巻…走って逃げた。水ではなくがれきの先端が押し寄せてくる。ビルの3～4階分。逃げ切れなくて巻き込まれた人たちも多い。渋滞にはまった車も……。迫り来るがれきから逃れられた。

山を一気に駆け上がった。後ろからがれきが押し寄せてきているのがバックミラーで見えた。助かったのは10～20秒のタイミングの差。それで自分は生きてる。生死を分けた数秒。そのような体験を持つ方も多い。九死に一生を得た感覚が心の中に残っている。それが何なのか？ 薄皮一枚の命。もしかしたら自分は向こうに行ってたかもしれない。そういう意識が強い。

父親は、1933年(昭和8年の三陸地震の年)に生まれ2011年に亡くなった不思議な感じがある。9月になって、父が亡くなっていることがDNAのデータでわかった。それでも、実感が湧かない。自分の魂がどこかへ行ってしまったかのようで冷静だった。

### <奇跡の太鼓 避難所で演奏した経験>

私は震災を忘れないようにしている。辛さをバネにする。楽器、音楽もそう。震災は様々なことを残した。でも忘れたい人もいる。

一週間して、被災した実家に行こうとした。でも、道はないので、がれきを乗り越えて進んだ。一階は鉄筋コンクリートだったので、いくらか残っていた。和太鼓とシンセサイザーを見つけた。泥につかった太鼓は、カビやシミができて使い物にならないだろうけど、持ってきた1輪車で持ち帰った。道行く人に太鼓を運ん



でいるので珍しく思われ、途中何度も質問にあった。警察、報道、地元の人・・・だんだん答えるのが面倒になってきた。

真水で洗うとうまく泥が取れたが、油臭い。きっと、油が牛皮を保護してくれたんだろう。ピカピカに戻って音もそのまま。”奇跡の太鼓”と呼ばれ、全国紙にも載った。(今年は、北京で音楽博覧会があって「奇跡の太鼓」として展示された。) 尺八とギターが流されたこと・・・自分の住所も掲載された。すると、下関に住んでいる94歳のおばあちゃん(小林みつ子さん)から「形見の尺八(一尺八寸もの)を使って欲しいので送りたい」という申し出があった。でも、仮の郵便局で手紙は止まっていた。個々の避難先には配達してくれず、自分で郵便物を取りに行かなければならなかったのが、気付くのが1ヶ月近く遅れた。その方は、何通も手紙を送ってくれていた。「お父様の形見は、申し訳ないので使うわけにはいかない。お気持ちだけでうれしい。」と返事をしたが「ぜひ使って欲しい」と強いて尺八を送ってくれた。

でも、自分には音楽をする気はなかった。精神的なダメージで音が耳に入っていない。すべて流されて無くなって、残っているのはその日に着ていた服だけ・・・。「明日からどう生きるか？」音楽をする余裕はなかった。でも、昔の仲間からギターが送られてきたり・・・目の前に楽器が揃っていく。「もしかして、音楽をやってみたら、と言われてるんじゃないか？」と感じ始めた。震災のショックのリバウンドで、無性に音を出したくもなってきた。「生きることは何なのか？」音楽で表現しようと思い始めた。

宮古、釜石でコンサートしたり、演奏の機会が増えた。「一緒にやろう！」と中央公民館でのコンサートにも誘われた。700人の聴衆の前で、郷土芸能とカップリングでコンサートをした。そこは、いつもは、物音しない、どんよりとした雰囲気のところだった。みんな、たたみ2畳のスペースで生活している。慰問のコンサートと言っても、プライベートの空間に土足で上がるような感覚で遠慮があった。シーンとなって空気が重い。どうにか終わると、あるおじいさんがステージに上がって来られた。マイクをぶんどって話し始めた。「すばらしい演奏してくれたのに、みんなこれではダメだ！ 辛いけど元気だそう。ガンバっぺし！」その話に、拍手が起きた。拍手の輪はだんだん大きくなった。「音楽をするってこういうことなんだ！」と、演奏したこちらが感動した。

別の山奥にある避難所では、参加者は10名くらいのところもあった。椅子もないので丸太に腰掛けて聴いていた。地べたに座っていることもあった。たった、一曲だけ演奏することもあった。そこである女性が目を赤くして深々とお辞儀された。自分が表現したことが形を変えて伝わっている確信を得た。音楽というフィルターを通して伝わる。震災がなかったら体験することはなかっただろう。

「風の電話」の佐々木さん、昔から知り合い。

詩を書いてCDを作った。彼との接点。「覚悟をしない人たちの死」病気の人には何らかの覚悟がある。災害にはない。心の準備がない。家族も亡くなった人も・・・。「風の電話」はその思いを故人に伝える。PTSD今でも続いている。

## <大槌の復興計画について>

大槌は、住んでいる地域の3分の2が津波危険地帯。盛岡・花巻・釜石・北上は3分の1。離れた人たちは戻って来ない可能性が高い。「町はどうなるのか？」出て行った人たちは別のところすでに再建している。「戻る」と言ってもイメージがわからない。不安を抱えながら淡々と時間が過ぎる。日に日にメンタルな重圧がかかる。

ある仮設住宅は、はじめ100世帯だったが60世帯に減った。「町をどうするか？ 再開発の模型は作られるがその通りに人が戻るのか？」大槌は人口減の比率が高い。女川町、南三陸町は犠牲者が多かった

人が住んでいる面積全体からすると大槌より被害の比率が低い。大槌は、面積に対して死亡率が高い。その分、復興のスピードが遅い。元々の少子高齢化の問題もあった。子ども連れの若い夫婦は、学校・教育・雇用の状況で見切りを付けて出て行っている人が多い。「働く場がないので人口がどうなるのか？」住民票の数は当てにならない。恐らく1万人を切っている。震災前は1.5万人いたが、今は9千人？ ゆくゆくは7千5百人になるかもしれない。復興団地の建設が遅れていて、もう1～2年かかるので若い人はどんどん出て行ってる。

内陸に移られた方も・・・花巻市に800名移住。一時的に生活を移すと思った人も5年経って、もう大槌に戻ってこれない。第一に仕事がない・・・肝心の魚が上がってない。漁業もパツとしない。

もう待てないので出て行ってしまふ。再開発してる土地の所有者も建築の計画がない。そのまま土地を持っているだけ。基幹産業は新巻鮭、昔は海の生業で生きてた。しかし今は・・・

隣の山田町は、自衛隊のレーダー基地があるので税金がある。北海道まで広いエリアをカバーしている。ミグ25 キャッチしたのはこのレーダー基地。

## 2012年12月 第4回復興会議

まちづくりの会議に町長がいない。復興大臣がたまたま来ていた。町長は一緒についてた。質疑応答の時間に町長と復興大臣が顔を出した。「いいどこに来た！」しかし、大臣は「共に頑張りましょう！」と発してそれで終わり。町長は「生の声を聞くチャンスなんで！ ちょっとでも話を聞いて欲しい」と言うものと思った。せつかく目の前にいるのに・・・そのまま立ち去られ見捨てられた感じがした。官僚が描いたプランニングはできてるからその通りすればいい。スケジュール通り動いてるだけ。住民との意識の違い。どこに声をあげたらいいのか？ 行政は、国が作ったマニュアルを大事にしその通りにするのが公務員の仕事。彼らは住民と違う。「マニュアルをいかに遂行するか？」を考える。全体主義で個人の話は切られる。あと2年で、復興予算はすっからかんになる。かさ上げ工事・防潮堤以外に議論がない。「そのあとどうするのか？」今のうちに、ちゃんと考えて欲しい。町、県民税が2倍になって困っている。

年配の人は、先が見えてるので「どうせ死ぬならふるさとに帰りたい。」と思っている人の割合が高い。旧大槌町役場(約40名の犠牲者が出ている)は、新しい町長の決断で取り壊すことになった。

14.5メートルの防波堤を計画しているが、まるで留置場の壁のよう。「町の中心部を2～3メートル盛り土する」とトップダウンで決まった。復興庁(国)→県→町、と計画の調整がなされているように見せかけているがはじめから計画は決まっていた。赤浜だけは5～6メートル盛り土される。なぜかはわからない。

大変なことだったけど、普段ない体験もした。それが「復興に含まれたらいい街になる！」と想ってた。人と人が触れ合う原点。自分のものを分ける、飴をあげる、もらえる。嬉しいと表現をする・・・。助け合う場面が多々あった。心の隔たりがない、オープンさをまちづくりに活かして欲しいと願ってた・・・ところが復興計画はどんどん変わってしまった。口には出さないけど復興計画に不満や疑問を持っている。

## <自然の力 これからの生活>

震災で自然の脅威を感じた。自然の力は、我々が考えるようなものではない。人間には計り知れない。不幸だけど勉強させてもらった。持っているエネルギーがどんなものか見せつけられた。人間は到底太刀打ちできない。宇宙の力はとんでもない。『遠野物語』にも「いざことが起きたら大変だぞ！」とあるが、自然への畏敬の念を持つことが大事。それなのに、自然の力に疎くなっていた、忘れていた。

生活をコンパクトにしてもいい、楽しく暮らせる方法はある。きれいな川・海・山。そこから何かが出てくる。自分で作って自分で食べる楽しさ。自然がある、空気がいい、贅沢ではないか？

国が決めた物理的な復興ではなく、メンタルな部分が大事なのだと思う。私は震災で人生観も変わった。国の提案に飛びつく市町村もあるが・・・復興は都市化に向かっている。でもどこか違う、無理がある。基本的なまちづくりはゆったりでいい。スローライフが大事。地方がその役割を持つ。人が住めればいい。貧しくても楽しいことを見つけられると思う。最近、畑を始めた。育てることは楽しい。土を触る快感、植物の成長に感動する。小さくても、モノはなくても、不便でも結構。そう言う人が増えているのでは？ 少数でもこつこつ。名古屋から漁師になった方もおられる。

生産性、効率追求は限界がきている。それを追いかけて続けるのはまともじゃない。成長の意味を問うべき。大きなものはリスクが伴う。原発がそう。お金やモノがあればいいのか？ 三陸鉄道は、もともと赤字路線だった。復旧も上が決める。本当に必要なのか？ 反発したらいいのに・・・「言っても無駄？」東北人はシャイ。口を開くのに時間がかかる。一見、辛抱強い・・・美德とも言えるが・・・住んで楽しい町、心の成長を遂げることを目指すべき。震災で目覚めた。生活を見直すことを考え始めた。人間は、自然を所有できるはずがない。この基本を忘れていた。絶対安全はない。大槌にもチャンスはある。大変でもチャンスはある。

## 東北のボランティアを終えて

山口天使幼稚園 廣国 美紗

私は今回始めて東北のボランティアに参加しました。どんな事をするのか話には聞いていましたが、実際行ってみると私にできるのかな、大丈夫かなと不安になりました。その気持ちが一番強くなったのは、仮設住宅でのお茶っこでした。行く前に、まだ津波の事で心を閉ざしている方もいること、方言が強いから話がわからないかもしれない事、私自身もどうやって話したらいいのか何の話をしたらいいのかわからずにいました。

でも、私がお話したおばあさんは気さくに話しかけて下さり、ひ孫さんのことや仮設住宅の話、大槌の郷土料理、特産物、祭り、たくさんのお話を教えて下さいました。そのお話の中で一番心に残っているのは、今までの家族の写真、ひ孫さんの写真がすべて津波に流され、とても悔しいと言われていたことです。私は、その話を聞いたときになんと声をかけたらいいか分からず、少し戸惑っているとおばあさんが「でも、その津波がなかったらあんたとは会えなかったな、ほんと遠くから来てくれてありがとう」と言って下さいました。その時にずっと不安に思っていたこと、緊張がほぐれ、楽しくお話することができました。私は、どこかでおばあさんが喜ぶことをしなきゃ、喜ぶ話をしないと、と勝手に決めつけていたんだなと思いました。たとえ、方言で話がわからなくても、話されている方の話を聞こうという思いが大切なんだなと改めて感じました。

又、視察に連れて行って頂き城山公園からの町の様子を見ることができました。前日に津波が来る前の町の様子を観ていたので5年たつてここまで復興したんだなと思いました。今はきれいに整備された所も昔はたくさんのお家が合ったこと、津波に流されたたくさんのお家の山があったこと、映像をみていたので、道路もできそこを走る車を見て前に進んでいるんだなと感じました。

しかし、旧役場に連れて行ってもらい、現地の方のお話を聞き、役場の時計の針がなくなっている所、窓のさんが津波で曲がっている所、役場に大きなヒビが入っている所をみて、心が苦しくもなりました。

現地の方に「あなたはこの役場を残してほしいですか？ それとも壊してほしいですか？」と聞かれて私は「残してほしい」と答えました。私は、この旧役場を残すことでこれから子ども達にも伝えていけると思ったからです。しかし、現地の方は「ここは私達にとったら幽霊屋敷そのもの。それに、大槌には他にもいい所がたくさんあるからここを残して観光スポットにしてほしくない」と聞き、私は複雑な気持ちになりました。

又、風の電話に行き、思いを伝えたい大事な人と話ができて、改めてその人との思い出を振り返ることができ、私にはとてもいい時間を過ごす事ができました。

ボランティアに行かせて頂いて、改めて現地に行けた事、現地の方と触れ合えた事、自分の目でその様子を見れて本当によかったです。今まで行かれた先生方の話だけでは、感じられなかった感情、思いがたくさんありました。そして、私が実際みて感じたこと、思いをこれから子ども達に少しでも伝えていけたらなと思います。

## 「夏季東北被災地ボランティア・大槌」に参加して 山口天使幼稚園 藤永まい子

この東北被災地ボランティア・大槌に参加をしてみようと思ったのは、自分が働いている山口天使幼稚園の先輩の先生方が毎年東北ボランティアに行かれていることがきっかけでした。震災があった日には、毎年震災を知らない子どもたちに話をしますが、なかなか伝えきれずにいる自分がいました。そこで、せっかく現地に行くチャンスがあるのだから自分自身で直接話を聞いたり、感じたことを子どもたちに伝えられればと思い参加をすることにしました。

大槌町に着いて一番初めに感じたことは、私たちが宿泊をしたベースやよく行っていたスーパーの周りは震災の跡もあまり見られずとても綺麗だったので、私たちが住んでいる町と変わらないように感じました。なので、その場所にも水が来て家が浸水したり、地震の被害があったことを知り驚きました。視察やボランティアを行う前に震災当時の映像や写真を見て勉強をしました。実際に津波が家や人・建物を飲み込んでいる状況を見て、なんとも言えない気持ちになりました。映像を通して見ても怖いのに、実際に目の前で自分の家や町・人が流されていく様子を見るのはどういう気持ちだったのだろうと本当に感じました。写真や映像・映画、また尺八奏者の大久保さんのお話しを通して、当時の被災地での現状を少しですが知ることが出来ました。

ボランティア活動では、10月にある岩手国体のためにおもてなし花壇と呼ばれる花壇の整備をしました。草を抜いたり、新しくパンジーの花を植えるなどの活動をしました。作業の途中で雨が降ってきたり、暑い中での作業は大変なこともありましたが、現地の人だったり、国体に来た人たちが少しでも綺麗な花壇を見て喜んで貰えたら良いなと思い、ボランティアのメンバーみんなで作業をしました。お手伝い出来たことはほんの少しだったかもしれないけれど、その活動に参加することが出来て良かったです。また、別の日には、お茶っこで仮設住宅に訪問をして、そこに住んでいるおばあちゃんやおじいちゃんとお話をしながら手作りのキーホルダーを作ったり、山口名物の茶そばを一緒に食べたりしました。仮設住宅に行く前は、少し緊張もありましたが、9月にある岩手県の有名なお祭りについて教えて貰うなど、楽しいお話をさせて頂くことが出来ました。特に嬉しかったのは、また別の日に2つ目の仮設住宅を訪れた時、私たちが山口から来たことを伝えると「遠くから来てくれたんだね。来てくれたことが嬉しい。」と言って下さる方がいらっしゃいました。帰る時にも私たちの姿が見えなくなるまで、手を振って見送って下さる姿を見て、本当に行って良かったなと感じました。

視察では、城山公園や旧役場・風の電話などさまざまな所に連れて行って頂きました。驚いたことは、宿泊していたベースから少し離れると町の様子が全然違うことでした。工事中のところ、まだまだたくさんあったり、今まで建物があったであろう所がまっさらになっていたりしました。だんだん復興が進んでいるように思いましたが、所どころ震災後のまま残っている建物や堤防などを見て、まだまだ時間がかかるのだなと感じました。また、旧役場のところで現地の方のお話を聞いた時に、「この建物を見に来る人たちが増えていて、観光名地っぽくなっているところがある。でもこの建物は、私たちからしたら幽霊屋敷でしかない。大槌には他にも良いところがたくさんある。もっと良いところをたくさん見てほしい。」と言われていた言葉がすごく心に残りました。実際に自分の目で見たり、震災を経験された現地の方のお話を直接聞くことで、震災を前よりも身近に感じる事が出来ました。

このボランティアに参加して思ったことは、「もっと早く私に出来ることはなかったかなあ。もっと早くボランティアに行けていたら、何か出来なかったかなあ。」という気持ちでした。ボランティアとして出来ることは少なかったかもしれませんが、大槌町に実際に行くことが出来てとても良い経験になりました。自分で見たこと、聞いたこと、体験したことを子どもたちに伝えていきたいと思います。貴重な6日間の体験、本当にありがとうございました。

## 「2016夏季東北ボランティア・大槌」

山口教会 瀬川由生子

釜石から大槌に向かうトンネルを抜けると、すぐ目の前に「マスト」というスーパーがあり、その向かいにある「ローソン」が目に入ります。この「ローソン」は震災の時に、被災地の人々の為に、無償で食品、飲料水、日用品等を提供したコンビニでその時には長蛇の列が出来たと云います。そのローソンの周囲には、カリタス大槌ベースが地域の方と協力して整備する花壇があります。近く岩手県内で行われる国体で、この大槌に来られた方の心を和やかにする為の花壇作りをしました。草取りのあと、多くの花を植える予定だそうです。花壇が広い上、雑草が多く耕すために雑草をとる人、座り込んで黙々と取る人、鍬で力強く草取りをする高校生等・・・柴田神父様を始め小学生から大人まで全員が4日間に分け頑張って「おもてなし花壇」の作業をこなしました。

仮設住宅では小物作りをしながら傾聴、昼食には「茶そば」を提供しました。児童センターでも高校生、幼稚園先生等若い人と子供達とのふれあいがありました。

今回は、震災復興に合わせて行われる岩手国体に向けて、「おもてなし花壇」の整備作業をおこないましたが、昨年植えた川岸のコスモス畑が先日の台風による大水で全滅し淋しい思いもしました。町では盛り土が完成し、道路となり無数の電柱も立って、整地が進んでいました。そこに人が戻って来るかどうかは、まだまだこれからの課題です。

地震後、会議の最中に津波に見舞われ、多くの犠牲者を出した旧町役場の取り壊しが決まったそうですが、地元の高中生から将来、この大震災を忘れない為にも是非残してほしいとの声上がり、再度、検討されることになったそうです。

今年の東北は、例年になく大雨、台風に見舞われ、我々が何う前の大雨で大槌町を流れる河川が警戒水位を超え、昨年河川敷に畝を作りコスモスの種を蒔き、今年の秋には、きれいな花畑が見れるはずだったのが、全部流されたと残念な報告を受けていました。

いざ現地をみると、やはり道路の護岸の相当上まで水が来ていた形跡が見てとれました。又、我々が帰ったすぐ後も台風による風水害で、河川近くの2カ所の仮設が床上浸水の被害を受け、家具、電気器具等が使用できなくなり、結局その2カ所は撤去せざるを得なくなったとの話も聞きました。こればかりではなく、まだ沢山の色々な被害を受けられたのでしょ。津波、地震、台風、大水とこの5年間の内、また特に東北の方々には今年の夏はダブル、トリプルパンチを浴びせられたに違いありません。本当に心からお見舞い申しあげたい。

さて、今回のボランティアには総員13名の参加を得ました。特に周南地区から柴田神父様の力添えもあり小学生、中学生を含めた親子3名、高校生3名、小さき幼稚園の先生1名の7名、山口からも天使幼稚園の先生2名と学生1名の3名で、計13名のうち10名が初めてのボランティア参加となりました。大変喜ばしい事で若い力が期待通りであった。

城山公園から見た、町の様子も3月に来た時から比べ、中心部になろうと思われる区域は、4m近くの高上げも終わり、綺麗に舗装され、白線もクッキリと見え、電柱も等間隔に立てられていました。周辺には新しく病院、小中一貫校、復興住宅、消防署等々少しずつ町らしくなっている姿を目にする事が出来ました。只、毎度の研修の際に見る旧大槌の街並みの映像が今、このだっ広い更地の地域の中にあつたことが、何度みてもどうしても結びつきません。今回で6度目の訪問になりますが、来るたびに道路の形状が変わっています。春に来た時は通れたのに・・・とか、あつ！この道が無くなつてるとか・・・これも、復興に繋がっていく過程の一時なんだと体感しました。工場、店舗も少しずつ増えていて嬉しい事です。

今回初めて参加してくれた皆さんは、研修の際に見た城山公園から撮影された津波が襲う、ショッキングなシーンを見て、いま出来つつある街区を見て、どんな感じを持たれでしょう？「遺体明日への10日間」のDVDと重ね合わせて複雑な気持ちになられたでしょう。同時に、この人達の為に何とか、どんな小さい事でも役に立ちたいという気持ちになつてくれたらと思います。

尺八奏者の大久保さんの震災当日の津波から逃れ九死に一生を得た体験談では一瞬の判断が生死の分かれ目になつたという貴重な経験を話されました。もし、その場に自分がいたらどう行動したでしょうか？「風の電話」では亡くなつた人や、友達へ、色々な思いを語つて不思議な体験をされた方も居られたと思います。

仮設での、小間物作りはいつも皆さん時間を忘れて、作品づくりに没頭されてます。その間には、お互いが色々な話をご当地の方言満載でやり取りする光景は絵になります。山口名物のお振舞・・・本来は「瓦そば」でと思いましたが今回は「茶そば」でしたが、大変喜ばれ安心した。

岩手国体を控え、花壇整理にも力を注ぎました。3年前に初めて行ったローソン前の花壇で、草刈をした事を懐かしく思い出しながら、作業を行いました。町の入口にあたるこの場所は、震災時に被災者の方々に無料で食糧等を配布されて有名になったコンビニだったと聞きます。

今回のボランティア期間中、町内のいろんな場所を見ながら確かに中心部の復興は確実に進んでいるのは実感できましたが、少し離れるとまだまだ当時の状態のままだったり、工事中の箇所も多く見受けられました。6年近く経っても元の街並みには程遠い感じで、1度こういった大きな災害を受けると、いかに復興に時間が掛るか改めて思い知りました。これからもまだ延々と続くのでしょうか。しっかりと見守り続けたい。

最後に思う事は、震災から6年近く経ちボランティア団体の数も年々少なくなり、関心も段々薄れていることに危惧しています。ただ今回応募して頂いた人の内、10名の方が初めての体験だった事が何よりの救いでした。来春には通い馴れた(?)大槌ベースも撤退し、事務所に統合されると聞きます。こんな中で、今迄大槌の町にまいた種が枯れる事ないよう願います。被災地に寄り添い、少しでも多くの方が参加、体験してくれることを望みたい。そして現地で見聞きしたことを、帰って1人でも多くの人に伝えて頂きたい。

## 夏季東北ボランティアの体験記 萩市 伊藤 依舞希(20歳)

私は、1日遅れでこのボランティアに参加しました。途中参加の私のことをとても温かく迎えてくださりとても気が楽になりました。不安だったことは、朝起きられるかどうかということと、優先順位を決めながら行動できるかということでしたが、楽しくまた個性的な仲間達に恵まれ、何とか終わることができました。周りがよく見れてないとよく怒られる私ですが、きちんと気を張って行動できてよかったと思っています。

私がこのボランティアで印象に強く残っているものは主に2つです。1つ目は、「遺体 明日への10日間」の映画を見たときです。この作品には歯科医師や助手が登場するので、歯科の勉強をしている私には強く胸に刺さりました。もしかすれば今後この映画の歯科助手のように震災で犠牲となった方を検査したりすることが私にもあるかもしれませんし、可能性がないとは言えません。そのような状況になった時、私はこの映画の歯科助手のように医師と助け合いながら、衛生士としての役割を果たすことができるだろうか?、そんな不安がもたげました。けれども、災害時に自分にできることはこれしかないと思うと、もっと勉強をし、技術を身につけていこうと思えるようになりました。

もし、私が次のボランティアに参加するときは、仮設住宅の皆さんに衛生士として歯磨き指導ができれば、などと考えたりしました。水がなくても歯をきれいにできる方法や、肺炎の予防指導なら私が衛生士になってたら唯一、人の力になれるものだと思います。

2つ目は、「風の電話」です。この話を聞くだけでも少しウルツときていました。実際に行って受話器を取り、私は12年前に亡くなった父親へ「私は元気にやってるよ」と伝えました。そして震災で亡くなった人々へも「どうか安らかに眠ってください」と祈りました。すると涙が溢れ出して止まりませんでした。本当に行ってよかったと思いました。他にも数え切れないほどの思い出を三日間でいただきま\_\_...ですが、ここでは書ききれません。でもずっと私の心の中に残って、焼きついて離れない思い出ばかりです。

この企画に参加して本当によかったと心から思います。瀬川さんご夫婦、柴田神父さまをはじめ、支え合

いながら生活を共にした仲間たちのことを私はずっと忘れません。人生の分岐点に立ち、悩みの多い時期、また、人生最後の夏休みでしたが、このボランティアに参加できてよかったです。本当にありがとうございました。三日間で得たものは、すべて私の力となっています。また、もし次回があればよろしくお願ひします。